

O12-070

小学1年生の実行機能と教室行動の関係

山本 訓子¹⁾、松村 京子²⁾

¹⁾関西福祉科学大学 健康福祉学部 健康科学科、

²⁾兵庫教育大学

【目的】東日本大震災後、宮城県の小学校では、暴力行為・いじめ・長期欠席の児童が増加し、現在も増えていることが報告されている(宮城県教育委員会,2016,2024)。これらの背景には子ども自身の能力として、学校適応に関連する実行機能の発達も関係していることが考えられる(Imai-Matsumura & Schultz,2022)。そこで本研究は、学校で簡単に実施できる実行機能の尺度を使用して、宮城県の小学1年生において、教師の評価する教室での問題行動は、子どもの実行機能が関係しているのか明らかにすることを目的とした。【方法】事前に学校長と保護者に紙面で説明を行い、研究協力の同意が得られた宮城県の小学1年生34名(男子14名,女子20名)が参加した。1年生の10月に学級担任が子どもの評価を行った。実施にあたり関西福祉科学大学の研究倫理審査委員会の承認を得た(24-11)。実行機能は、子どもの実行機能検査尺度(CHEXI)(Thorell & Catala,2014)から抑制とワーキングメモリを使用した。得点が高いほどその能力が低いことを示す。教室行動は、子どもの行動チェックリスト(CBCL-TRF)(Achenbach, 1991; 井淵,上林,中田,2001)から、ひきこもり、不安/抑うつ、社会性の問題、思考の問題、注意の問題、非行的行動、攻撃的行動を使用した。学力は子どもの行動チェックリストから国語、算数の学業成績を使用した。【結果】実行機能の下位項目である抑制およびワーキングメモリと行動評価の相関関係を調べた。抑制は、社会性の問題、注意の問題、非行的行動、攻撃的行動と正の相関関係があった。ワーキングメモリは、社会性の問題、注意の問題、非行的行動、攻撃的行動と正の相関関係があった。国語は、抑制、ワーキングメモリと負の相関関係があった。算数も、抑制、ワーキングメモリと負の相関関係があった。【考察】実行機能尺度は宮城県の小学1年生の社会性の問題、思考の問題、注意の問題、非行的行動、攻撃的行動と関連することが示された。この結果は、実行機能と社会的行動の関連性を示す先行研究とおおむね一致している(Montroy et al.,2016)。さらに実行機能尺度は、国語と算数の学力とも関連していた。実行機能は比較的簡単に向上する能力として、介入プログラムが多く開発されている。担任教師が実行機能を評価することにより、支援が必要な児童を特定し、実行機能のサポートをすることで、学校適応を促される可能性が考えられた。

O12-071

小児実行機能尺度(CHEXI)日本語版の開発:小学校入学児の実行機能リスクのスクリーニングへ向けて

松村 京子

兵庫教育大学

【目的】実行機能(EF)は、子どもの学業成績や他者との関係に影響し、EFに欠陥のある子どもは学校生活に困難を示すことが知られている。欧米では、子どものEFを把握するために、EFの尺度が開発されている。その中で、小児実行機能尺度(Childhood Executive Functioning Inventory (CHEXI); Thorell & Nyberg, 2008)は、親または教師が評価する24項目から成る尺度で、様々な言語に翻訳されている。さらに、CHEXIは、学習障害児、ADHD児を発見するためのスクリーニング尺度としても使用されている。本研究では、EFにリスクを抱える日本の子どもを把握するために、CHEXI日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検証することを目的とした。【方法】対象児：保護者から承諾を得た、小学校入学前半年以内の152人の5、6歳児(男児77人、女児75人)が参加した。CHEXI日本語版：CHEXIを日本語に翻訳したCHEXI日本語版を使用して、7人の担任教師が対象児を評価した。このうち4人の教師が、4か月後、再評価した。実行機能課題：ワーキングメモリー(WM)課題(逆唱課題)と抑制コントロール課題(フルーツ・ベジタブル・ストロップ課題)を検査者が対象児とオンラインで対面し、リモートで実施した。【結果及び考察】CHEXIは2因子構造(WMと抑制)であることが諸外国で報告されていることから確認的因子分析を行った。その結果、日本人の5、6歳児においても同様の2因子の適合性が確認された。また、Cronbach α はWM 0.975、抑制 0.941、EF合計 0.89、McDonald ω はWM 0.975、抑制 0.942、EF合計 0.89で、尺度の内的一貫性が認められた。CHEXI日本語版のWMと抑制の尺度得点と、対面で実施した2つの課題得点の相関を調べた。CHEXI日本語版のWMと抑制得点は、直接課題のWMと抑制得点と有意な相関があり、CHEXI日本語版の妥当性が示された。CHEXI日本語版の再現信頼性を調べるために、教師の1回目と2回目の評価の相関係数を求めた。WM、抑制、EF全体の1回目と2回目の得点の相関係数はいずれも0.9以上であり、再現信頼性が示された。【結論】CHEXI日本語版は小学校入学前の子どものEFリスクを把握するために有効な尺度と言える。